経過中に 2 回の下肢切断を経験し約 5 年間在宅血液透析（HHD）を継続し経た1例

医療法人衆和会　長崎腎病院

○宮崎千秋　中山美季　堀幸一郎　舩越　哲

【背景】
透析患者の下肢切断後の 5 年生存率は 50%以下と低く、死に至らなくても QOL は著明に低下する場合が多い。今回、下肢切断後にHHDを導入し、その後 2 度目の切断を経験し、5 年経過し得た症例を報告する。
【目的】
経過中に 2 回の下肢切断後を経験し、HHD 歴 5 年を経過し得た症例の因子を解析する。
【症例】
70 歳男性、2016 年 9 月に血液透析導入、2017 年 8 月に下肢 ASO 憎悪により右大腿の切断術を受けた。自宅までは 150 段の階段があったものの、介護通院と患者家族の協力で HHD 訓練を完遂し 2017 年 12 月に HHD 移行となった。その後 2022 年には再度左リスフラン関節切断となり、再トレーニングを経て在宅血液透析復帰した。
5 年間の経過を通して HHD が継続できた要因として、①患者自身が希望する環境で治療を行うことができた、②経済的負担を軽減することができた、③HHD により十分な透析量が確保できた可能性がある。
【考察】
今回の下肢切断患者の症例により、患者の熱意や献身的な家族の協力、医療者側の支えがあれば、ハンディキャップを抱える患者でも HHD は可能であることが示された。